

永遠の少年

君は還暦を過ぎたるといえども少年のままなり。

昨年、リュックを背負いて、わざわざ酷寒の季節を選び、独りシベリア鉄道の旅に挑みぬ。車中における君の珍談奇談はゴーゴリの小説の一節を髣髴せしめて楽し。

少年の好奇心と冒険心は定年を迎えて、にわかには咲き誇れるにあらずや。

さまざまな活動に労をいとわず、社会貢献に余生を捧げたと言う。誉むべきかな。

君はラグビーに明け暮れし湘南健児なりしと聞く。汗くさき体臭を発散しつつ、球を追い、蛮声を発して猪突する君は、血潮熱くして直情怪行なり。

大学時代は学生運動に投ぜしと聞き、われの同類なりと親近の情を抱く。

君に事を求むれば、直ちに豊富なる人脈をつたひて、その行動は敏にして俊、常によりき結果をもたらず。ありがたきかな。

君は長年、旅行業界に在りて、そのツアー企画の斬新にして、用意周到なるはいかなる同業者の追隨もゆるさずと聞く。

君の得意は、老婦人連をして箆笥の底に眠れる夜会服をトランクに秘せしめ、欧州一流の社交場にて妍を競わしむるにありと聞く。女の一世一代の喜びを極めしむる企画の心憎きは、君のいかなる胸中より出ずるものなりしや。

君の楽しき酒にて、杯を重ねれば、舞い上がりて、談じ来たり、談じ去り、話題の尽くるを知らず。そこはかとなき滑稽味を帯びたる少年の稚気は愛すべきかな。君は腹中に蔵するものなく、媚びず、驕らず、人を愛し、愛され、人と交わるに虚心坦懐、跡を濁さぬ清流の如し。大器晩成して、本日、一書を上梓す。

君の新しき門出を祝して拙き詩を贈る。めでたきかな。

NPO法人 知的生産の技術研究会会長 八木 哲 郎

近藤 節 夫 様

(平成十六年十一月二十二日、近藤節夫出版記念会にて朗読)